

新刊紹介 『日本古代木簡集成』

武田和哉

このたび木簡学会の編集による『日本古代木簡集成』が(財)東京大学出版会より刊行された。木簡学会創設二〇周年を記念して企画されたという。実は既に、木簡学会は創立一〇周年の際には『日本古代木簡選』(岩波書店刊)を編集・刊行し、当時の木簡研究の最前線をまとめた経緯がある。それから約一〇年を経て刊行された本書の内容を見て実感することは、何よりもまず全国における古代木簡の出土数と関連遺跡の増加という事態であろう。

それでは、まずは本書の概要について簡単に紹介する。体裁はB4判、図版はカラー図版二ブレートも含めて計一二六ブレート、その後続に釈文・解説・表が一三〇余頁ある。本書の構成上大きな特徴としては、前回の『日本古代木簡選』では遺跡単位ごとの木簡の配列と報告であったのが、今回は木簡の記載内容や形態別に分類された報告となっている点である。これは、前回以降も多数の木簡が陸續として出土・報告され、多くの出土事例として蓄積されたことで、記載内容や形態面からの比較分類研究が進展したことを端的に示している。

また、写真図版については、印刷技術や撮影技術の進化もあってか、極めて精緻な出来上がりとなっている。そもそも木簡は出土した時点からその保存環境には十分な注意が必要であり、その如何によつて墨影の状態にも大きな影響を及ぼすものである。よつて、保存処理等を経ない個体については特に研究者が実見することさえも制約が発生するのが実状であるが、このような明瞭な写真図版を持った集成が世に広く提供されることは、資料実見にかかる研究者や関係者の労力を少なからしめるとともに、遺物保存の観点からもきわめて望ましいことであろう。

本書の写真図版に掲載されている木簡は、先述の如く内容・形態別に分類された上でのもので、これは後段の釈文や解説との配列順と対応している。よつて、写真図版を見つても必要に応じて対応する部分を確認することが容易となるよう工夫されている。

次いで解説の部分に移る。以下のような章より構成されている。

第一章 総説
第二章 荷札木簡

第一節 荷札木簡の概要

第二節 荷札木簡の研究

第三節 国別荷札木簡

第三章 文書木簡

第一節 様式別文書木簡

第二節 記録関係木簡

第三節 内容・用途別木簡

第四章 その他の木簡

なお、このうち総説では本書の企画・刊行に至るまでの経緯の説明に加えて、近年の木簡研究に関する概要や諸問題、そして今後の課題が述べられていて、木簡研究に関心を持つ研究者ならばまず読んでおきたい部分であろう。また、本書の編集上で大きな柱となつた木簡の分類に関しても言及されている。重要な事としては、木簡が単なる紙の代用品でない点、文書木簡の位置づけの問題、そして木簡の機能の面など、さまざまな視点からの研究の結果、文書との書式や用法の相違、あるいは全国各地における木簡利用の実態、木簡の作成から廃棄にいたるまでのサイクルの解明など日本古代木簡の実態として多くの姿が浮かび上がってきたとし、「われわれは令の規定や正史の記事から出発すべきではなく、木簡などの第一次史料から出発すべきで、かくして律令制の内実が明らかになるだらう。」と結論づけている。

総説の言を借りれば、木簡の記述から導き出される世界とは、正史や律令など既存の史料より想定される範囲を越えるものが多いということであろう。すなわち、律令の規定よりイメージされる世界よりも遙かにバリエーションの多い社会の実態の一端を、木簡という出土文字資料が我々に伝えている訳である。異なる視点からみた歴史の様相を伝えるものとして、貴重な存在である。ただ、こうした状況は何も日本古代史のみで起きている問題ではない。例えば、世界各地において、文字を持つ文化圏が形成され展開していく過程で、公的に編纂された史料が出現して以降の時代に関しては、伝世した史料と、遺跡調査等で発見された文字史料との間に、多かれ少なかれ一定のギャップが生じるという現象は、実は数多見られるものではある。そうした際には、両者の比較検討という作業へと進んでいく訳であるが、遺物としての側面を持つ木簡などの出土文字資料は、確かに現実に存在しているという点からして説得力には恵まれているといえるものの、どうしても断片的な記述しか得られぬ傾向にある。よって、一定のまとまった情報量を有し、体系的な世界観を伝えることが可能な史料、日本古代史でいうなら、正史や律令などのような史料に対して、それとは異なる世界観や社会の様相・側面を提示するだけの一體感や拡張性がある史料としての特質を持つに至るには、相当量の出土事例の蓄積と、詳細な検討という過程が必要になろう。そして、多数の個体事例を扱う段階では、当然に

して分類という手法を導入した研究が必要となつてくることは、容易に理解できる。

そういう意味では、今回の本書の編集方針が、遺跡別ではなく木簡の分類案を提示した上で解説作成という方向となつたことは、日本古代木簡の研究段階が新たなる次元へと進んだことを示している。まさに、総説において「木簡研究の初步的段階」に止まるべきではなく、木簡学の自立を意図的に図るべき時期にきているといつてもよからう」と主張されている通りであろう。

さらに、本書の登場は専門的な研究者のみならず、全国で発掘調査を担当する関係者、あるいは古代史に関心を持つ一般市民向にも、極めて有益で利用しやすい内容・構成であると考える。特に、分類ごとの解説と末尾の出土遺跡の解説は、出土事例の確認や比較には非常に利便である。かかる内容は、木簡学会が創設当初の設立趣意書において、「発掘調査に関する人たちとの密接な連携・協力のもとに、木簡に関する情報を国内に限らず広く蒐集し、(中略) その成果を広く一般に普及し、正確な史料として活用をはかり、さらに今後新しい木簡の出土に備えることが肝要である」と謳われていることを正に体現していよう。創設当初の精神が、今なお明確に維持されている点は実に評価できる。

このように、木簡学会創設以降、多くの関係者や研究者の尽力によって大きな進展を見せた木簡研究ではあるが、当然今後の課題も

あるだろう。本書の総説では三点の課題について言及がされている。すなわち、第一には、木簡の形態と内容の分類法についての検討、

第二には、日本木簡の始源を明らかにする上で、中国や朝鮮の木簡との関係を一層解明すること、そして第三として、国語学者などとの共同研究による、文字使用の場の具体化によって、文字世界の様相を明らかにする、というものである。

木簡の分類という問題は、今後の出土事例の蓄積の増加によっては、必然的に再検討を要する重要な課題になるにちがいない。総説でも述べられているが、木簡の形態と内容、機能は密接に関連し、総合的な情報をもつて分類することは極めて困難であるとして、木簡は主として書式や内容に基づいて分類をしている。その結果、五〇種近い種類を挙げているが、同時に総説は「これらの類別は書式によるものと内容によるものとが混在しており、」とも述べており、分類法がまだ未成熟であることを示唆している。

とはいっても、記述内容などから分類法を確立するということは、現状で古代の木簡に一定の書式が認められているとしても、容易なものではない。一時のピークを越えたといえども、全国の発掘調査件数が多い状況は変わらず、それに伴い毎年出土する木簡の数量は、仮に古代に限定したとしてもかなりの数になろう。こうした中で、新たな発見や知見の追加が随時あり、また様々なバリエーションも予想される。こうした状況では、分類の確立ということは永遠の課

題であるのかもしれない。私的な意見を述べさせて頂くならば、あまり分類に拘泥し過ぎるのは、かえつて得るものがないのではないかと見ていく。それは、木簡に限らず、他の遺物等についても同様な傾向にあるのではないだろうか。

それから、中国や朝鮮の木簡との比較研究という問題も、極めて重要な課題であると感じている。ただし、日本の古代と並行する年代に限らない、幅広い時代や地域を対象とした観察が重要のように思われる。また、当然木簡そのものを比較検討することが重要であることは言を待たないが、その運用実態などの背景も同時に検討していく必要があるかもしれない。例えば、近年の中国史の研究では、皇帝の意志など中央の指示が如何にして地方へと下達されていたのか、その実態を探る研究がいくつか見られ注目されるが、それらは時代や地域によつて様相にかなりの差があり、なかなか複雑でもある。日本古代の木簡のあり方や実態を相対的に評価する為には、このような比較検討の重要性は当然首肯できるものの、もしもそれが一見して似たような現象を捉えて比較するだけの皮相的な検討に留まるのであるなら、不十分かもしれない。

また、中国などの事例と比較検討を行う段階よりも以前に、もう少し研究を進展させておくべき課題もあるように感じられる。個人的に関心があるのは、日本の木簡の時代的な変化の過程をより一層追求することである。ただし、木簡の場合は記載内容の問題もある

ので、例えば遺物のプロポーションや製作技法に着目して行われてゐる土器等の遺物編年の作業などとは安易に比較できないような、さらに複雑な問題や困難があるのかもしれない。しかし、日本古代において確立された律令体制が、さまざまなものによって変遷していく過程において、おそらくや木簡も時間軸に沿つて何らかの変化は遂げているはずであり、特に古代より後の時代に至つて伝達手段としての主役を紙に譲り、以後は限定された用途でのみ残存するようになつていく木簡の歴史的変遷に迫ることで、むしろ木簡という存在の本質が見えてくるのではないかとも考える。そのようなことで、今後のまた近い時期に、今度は時代的な変遷に主眼をおいた古代木簡の研究なり集成なりが登場することを願つてやまない。

以上、素晴らしい成果を集成した本書の紹介としては、あまりにも釣合のとれぬような雜駁な内容となつてしまつた。これはひとえに筆者個人の力量のなさに帰するものである。今後の木簡学会の発展を期待し、木簡研究の進展を祈念しつゝ、擱筆させて頂く。

(一〇〇三年五月財東京大学出版会刊、B4判図版一二六ブレート、解説ほか一四二頁、本体一〇〇〇円)